



松延堂梓

三編上

20

25

30

35

A525
31



盛紫

三層

上の巻

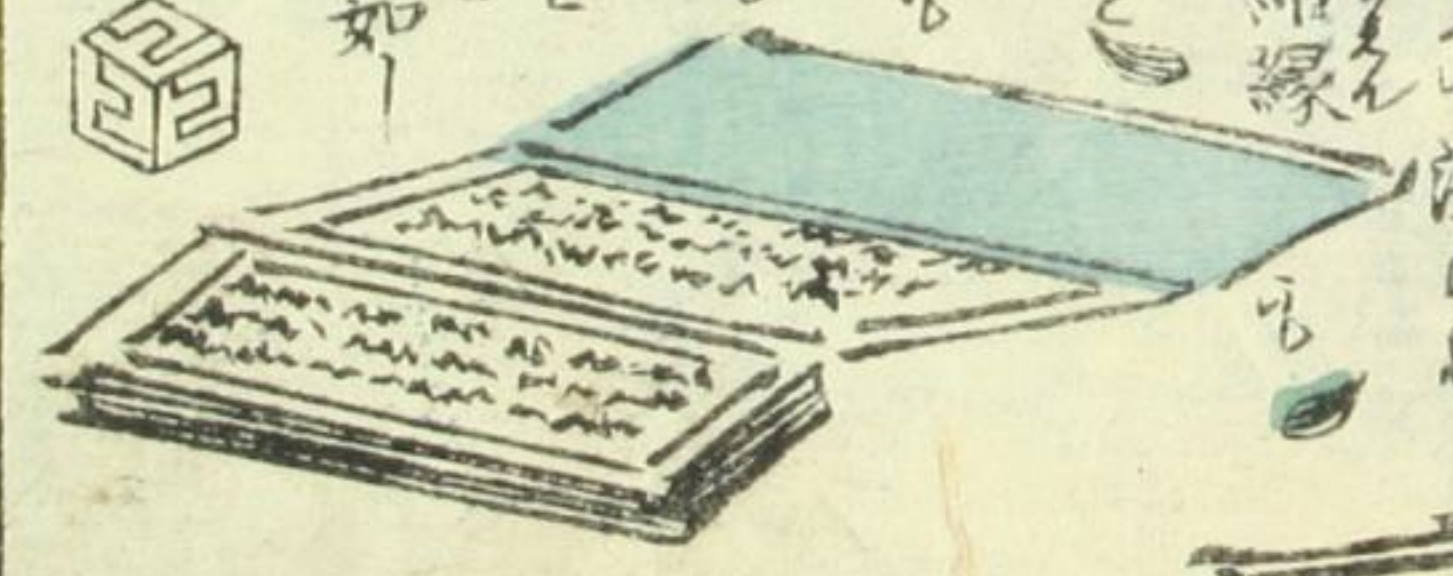
48-8329

北廓之卷三編廻序

三界火宅の佛説の浮川竹の苦界
 と了り愛別離苦の後朝の亡き盛紫の情 死と
 思ひ後世と吊ふ二世の盛紫の清き赤心へ実み泥中の蓮ともくく濁らぬ
 水晶の念珠の煩惱消滅を願ふて来る客へ再來を返すとの結縁
 御法に因む經陀羅尼巻を重ね三編の大團圓を解々
 松延堂が請求の筆採れと許り拙作の長譚の退屈をも
 不顧壽量品の末永き結縁迄と覽之程願ふと以て
 恐きある壁八百の方便品是も手管の筆の何や足ぬ趣向と
 其俗の本末苦境とら漸々綴りたる序品を茲にかかぬ如

明治十四年秋

春亭史彦







豊栄妻清女

長男豊興



二つんぐりお清は様も持て
 おとせ密めて隠とて杖の素性
 お清の道はまを葉が持
 の悪後まじはつまへせ
 にははの室ゆ
 度らなま上
 清の勤めさ
 かるそつ日夜の
 抱ひて父就のつ
 怒りて難縁のお
 侯浅は松の
 公苦しとある区

お清は様も持て
 白は清は様も持て
 由女の悪とやう物めくのおめ
 どのおさんが今やもまがまじ
 と枝をかう備に中を足形ひ来と次へ

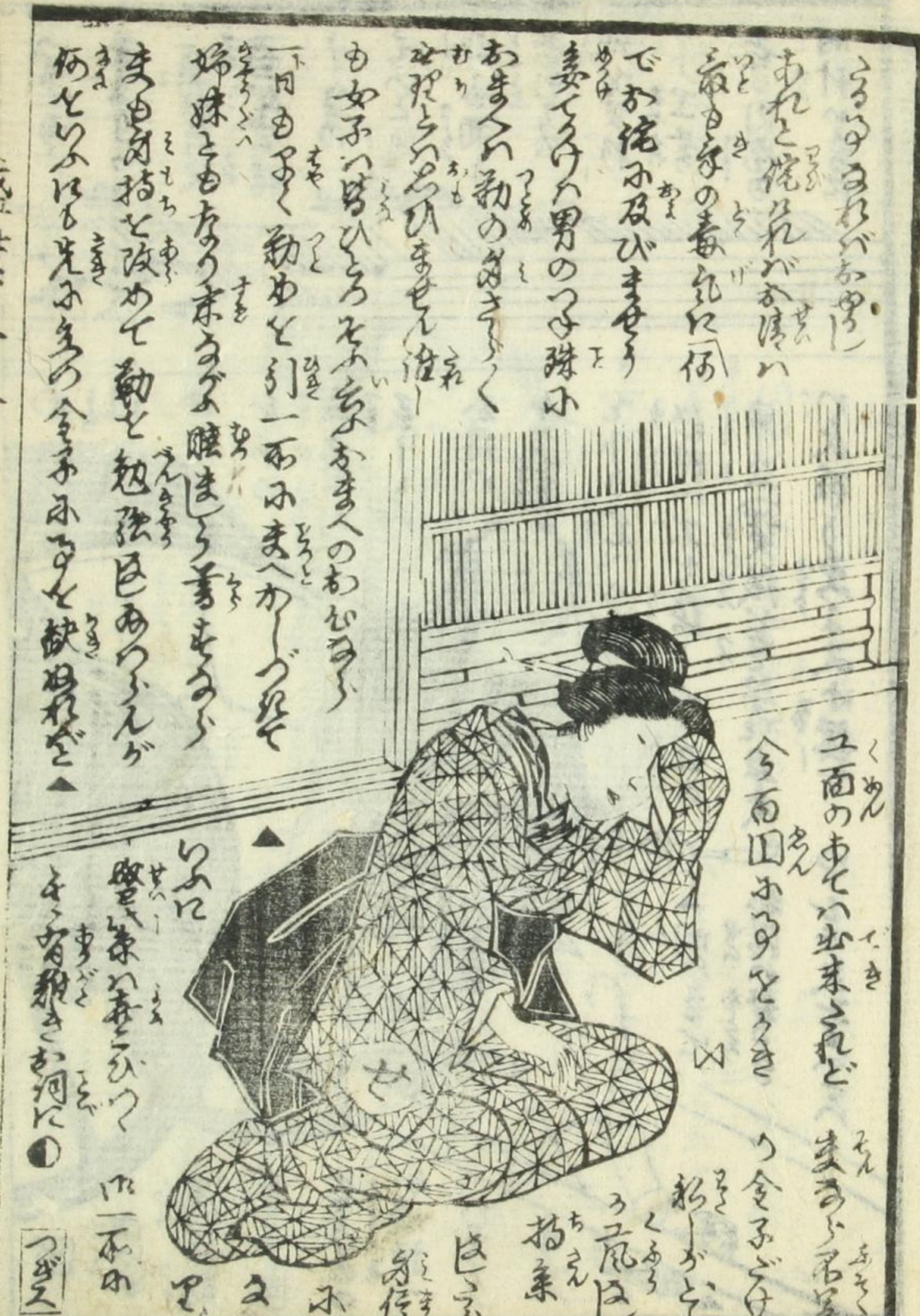


つぎ ねむ小盛... 物め... 秋... 月... 女... さん... か... せ...

女が二人の子とほ... さん... か... せ...

あか... 和... 療業

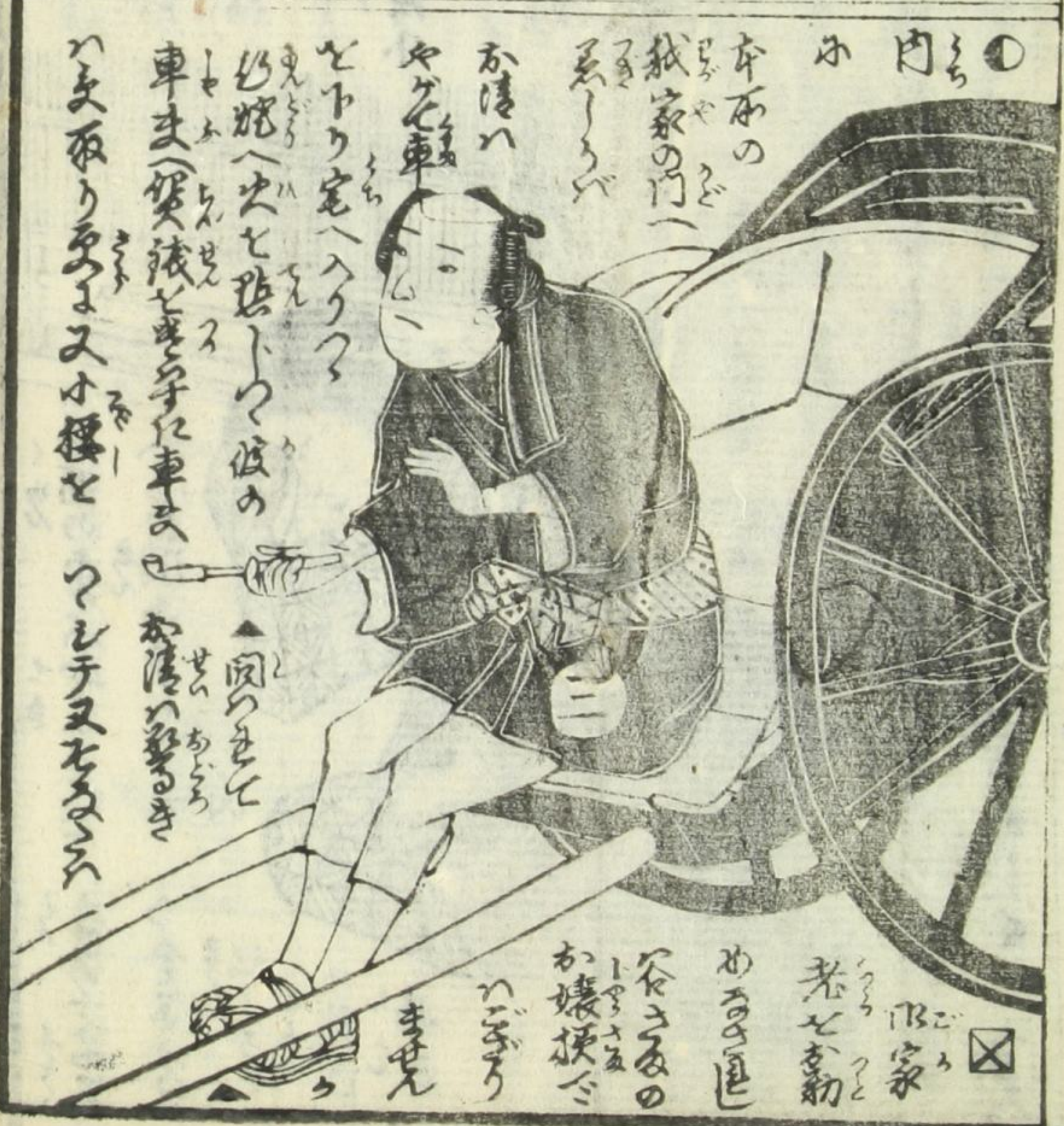
二面... 今... 山... 二... 山... 二... 山...



あれと... 女... 一... 姉... 夫... 何...

二面... 今... 山... 二... 山... 二... 山...

八景 舟の
 出まする
 と聞かれて
 登り出れ
 一歩の
 まのと返
 するも相と
 共れよ
 洞とほり
 うらま
 若る内流の
 村汁の香に



舟の
 本所の
 我家の門
 系しう
 か清の
 やが車
 せり定へらう
 仕舞へ火と下つて彼の
 車夫(僕)と手子に車夫
 の文取りあふ又小櫻と
 つし又七とふ
 何人とも
 久おを忘れた
 此の生以
 せ
 舟家
 若七初
 める運
 谷さるの
 お嬢様
 のこり
 ま見

舟の
 さとく不
 暢男容言に
 甲斐長く
 赤川橋とま
 出て我家へ
 名中由南
 全の名来小
 著かむ程きの
 踏不客を坊の人力車夫か小櫻をかあめお合
 までお供ととのあお清のきいと僕と定めて
 おきあれ車夫は足がきとあめつ皆村の



舟にて
 舟めて
 何人とも
 久おを忘れた
 此の生以
 せ
 舟家
 若七初
 める運
 谷さるの
 お嬢様
 のこり
 ま見

ついでに
その内妻の不計しる風邪の心
地と打掛しが流すく雨をりしが騰げ
の陳まても移る老女の四身を
かきおろしやをよと云のに爲下ぬ
縁へ赴むきくは由妻妾中上とよ
怒せしされど婦さ老が虫状と
冒すも情ありあり生内不機を
杉中への直接お申し
上人と病世をうら
不計好治の由發車
私に東京でか喉とろりし由君下五かま一



秋高の夕より
親の冥宅（世）本
事や洞鑑う小物
借り交しついで
も交の向とあ
て驚く感其以赤
病し打時帯一のそ
末に名りくのうより
て金子洞達被とと
交合し申病のゆぞ
受後毎小
と帯以の

あふど日々の
階下に連く
とこそるあは
ゆるさるらち
君免の朋友不巡
あひ路根の形容
子此個人い
子松さされ由府と
承けり承ふとてゆにわ而不
知るねは得ぬ得中もいと
意外の内を海たか免しあれと



車
供
お
せ
と
ま
る
と
世
田
ハ
盟
招
ま
く



ついでに
 実をききまはに
 お清の懐ひて
 直様車不
 打あつた
 びありの
 ぼんぼり
 相違ふを必
 めりたる
 ○盛紫の懐ひ
 久のちをむせ
 ねのぬきまき
 ねに酒果の客の

入帳
 船帳

▲まの
 又
 生客
 せと
 せと
 せと

△おぼろ
 箱に
 一お
 あれ
 梯のの箱に運
 らるに原引
 はて紙が那
 屋一取つて又も
 名案のちり紙
 造わりのり毛



おられ
 古法をよりの用うと
 扱おて清さへいさ長席下
 禿が意きまきり内徳の
 花をさんあつらんを一寸
 目んでと云まきしと云に
 盛紫のまきり内徳にまき
 白人教者肩のり飛る小接戸を
 次へ匠して盛紫に向ひあつらん外のり
 どのまのがけるよりあつくと肩入さごまか
 目と持てまきりかめ客をまきりとすいん人の
 来る客外の客之由知は先換けりかぬまき
 備金まきとのまきり果はまきりとのまきの持り

めまらばとも
 限て
 けい五日まね
 小巻一ききまきの
 名宛小巻と封紙
 切り張む文との
 あまきり
 七



つぎに...
まこと...
おれ...
りり揚...
るも中...
たる...
よまの...
あひ...
ふか...
を備...
客...
突つ

ろろ...
は...
と...
め...
か...
か...
か...



おれ...
若...
てと...
晴...
死

せ
男...
い...
近...
山...
と...
山...
那...
か...

盛...
三...
上



今更にもお嘆一とひい世に合ふも
今更にもお嘆一とひい世に合ふも

お急ぎにきこふにとおはるゝ風
と備不形以上申と云ふに清由
候てとあそびとあはれと
暇乞へてまわつ彼の
二弟が車一多の
家入こそめり
○お由公の
頼りて機家へ
細色を止者
くと送る内
○

今日が
とる小
何れのお
全枚の
盛装の
お給の
いづくへ
あ感の
何方へ
おを
何と



今日が
とる小
何れのお
全枚の
盛装の
お給の
いづくへ
あ感の
何方へ
おを
何と

○



北廊花盛紫

三編 一〇〇〇切

春亭火彦作
梅堂國政画

滋賀縣 今常盤布施譚

三編 一〇〇〇切

松林伯圓綴
梅堂國政画

雪月花三遊新話

三編 一〇〇〇切

篠田仙果録
梅堂國政画

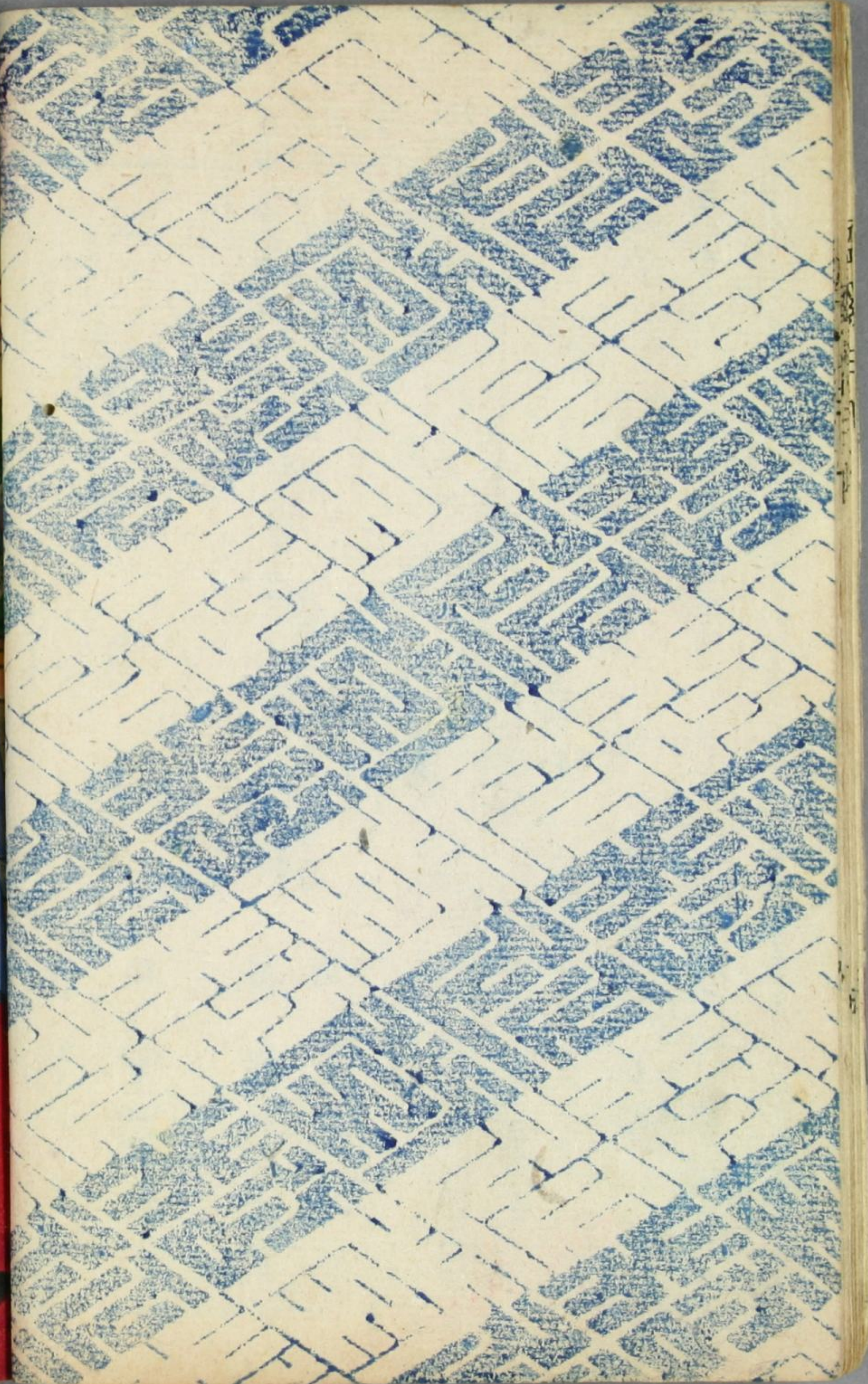
書物問屋

東京日本橋區松島町壹番地
松延堂大西 伊勢屋庄之助

北廓の花盛紫

春高史彦編

三編中



△ 橋一 二途
 ○ 橋一 二途
 面々 橋一 二途
 上府の大起會出入り
 大坂の蒼橋ふ繁昌の家
 去地と男日新細き煙りゆき
 昭日ハ如所して生玉の通り小道
 佐長由被さし 裏備家さ個石川
 熱路る路の者もあふつる
 昔々甘く代由今ハ強く
 以今年十四のお田勢と相
 次ハ



次ハ 悲ハ 人の老ハ 花 七 葉



まろ
 三ノ
 中

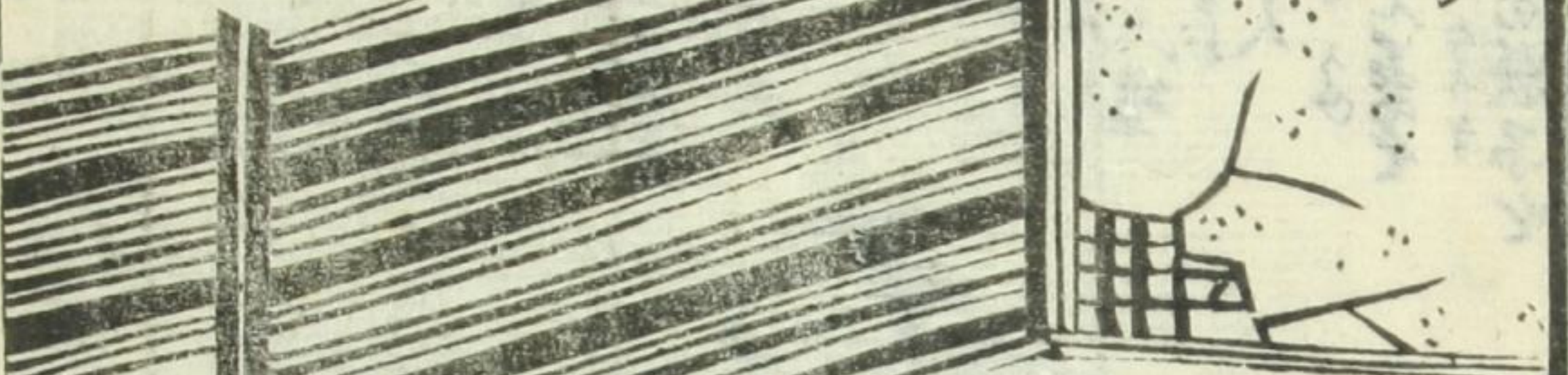
松延
 半板

妻小お
 世を力らむ
 世の免痛病
 小海多務
 由志娘おろ
 ハアガガ
 客下七坊
 その中
 光陰ハ夫の如く
 行く由三幸の妻
 終と
 送り



看
 方
 三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百
 一百一
 一百二
 一百三
 一百四
 一百五
 一百六
 一百七
 一百八
 一百九
 二百
 二百一
 二百二
 二百三
 二百四
 二百五
 二百六
 二百七
 二百八
 二百九
 三百
 三百一
 三百二
 三百三
 三百四
 三百五
 三百六
 三百七
 三百八
 三百九
 四百
 四百一
 四百二
 四百三
 四百四
 四百五
 四百六
 四百七
 四百八
 四百九
 五百
 五百一
 五百二
 五百三
 五百四
 五百五
 五百六
 五百七
 五百八
 五百九
 六百
 六百一
 六百二
 六百三
 六百四
 六百五
 六百六
 六百七
 六百八
 六百九
 七百
 七百一
 七百二
 七百三
 七百四
 七百五
 七百六
 七百七
 七百八
 七百九
 八百
 八百一
 八百二
 八百三
 八百四
 八百五
 八百六
 八百七
 八百八
 八百九
 九百
 九百一
 九百二
 九百三
 九百四
 九百五
 九百六
 九百七
 九百八
 九百九
 一千
 一千一
 一千二
 一千三
 一千四
 一千五
 一千六
 一千七
 一千八
 一千九
 二千
 二千一
 二千二
 二千三
 二千四
 二千五
 二千六
 二千七
 二千八
 二千九
 三千
 三千一
 三千二
 三千三
 三千四
 三千五
 三千六
 三千七
 三千八
 三千九
 四千
 四千一
 四千二
 四千三
 四千四
 四千五
 四千六
 四千七
 四千八
 四千九
 五千
 五千一
 五千二
 五千三
 五千四
 五千五
 五千六
 五千七
 五千八
 五千九
 六千
 六千一
 六千二
 六千三
 六千四
 六千五
 六千六
 六千七
 六千八
 六千九
 七千
 七千一
 七千二
 七千三
 七千四
 七千五
 七千六
 七千七
 七千八
 七千九
 八千
 八千一
 八千二
 八千三
 八千四
 八千五
 八千六
 八千七
 八千八
 八千九
 九千
 九千一
 九千二
 九千三
 九千四
 九千五
 九千六
 九千七
 九千八
 九千九
 一万
 一万一
 一万二
 一万三
 一万四
 一万五
 一万六
 一万七
 一万八
 一万九
 二万
 二万一
 二万二
 二万三
 二万四
 二万五
 二万六
 二万七
 二万八
 二万九
 三万
 三万一
 三万二
 三万三
 三万四
 三万五
 三万六
 三万七
 三万八
 三万九
 四万
 四万一
 四万二
 四万三
 四万四
 四万五
 四万六
 四万七
 四万八
 四万九
 五万
 五万一
 五万二
 五万三
 五万四
 五万五
 五万六
 五万七
 五万八
 五万九
 六万
 六万一
 六万二
 六万三
 六万四
 六万五
 六万六
 六万七
 六万八
 六万九
 七万
 七万一
 七万二
 七万三
 七万四
 七万五
 七万六
 七万七
 七万八
 七万九
 八万
 八万一
 八万二
 八万三
 八万四
 八万五
 八万六
 八万七
 八万八
 八万九
 九万
 九万一
 九万二
 九万三
 九万四
 九万五
 九万六
 九万七
 九万八
 九万九
 十万

四年の妻人の心も
 あつたの十日夷由
 獲ちあてや如月
 の物首より
 空のわさささ
 忽ちとふて
 大逆の夜その
 病の床不神
 之にが田うが
 短ふふ考ふか
 以分ノ、に弱り
 をとまると云白



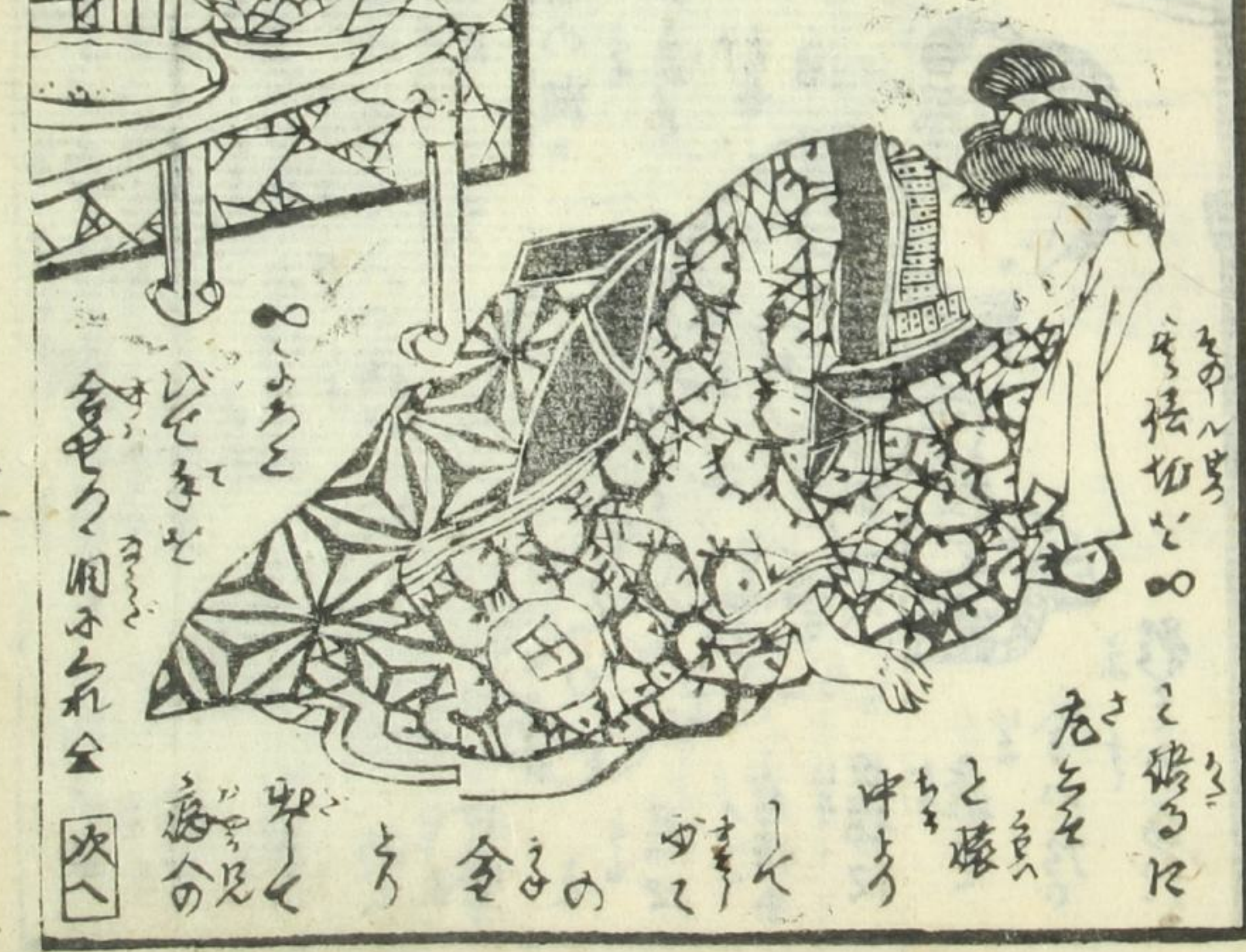
田
 之
 某
 逃
 医
 海
 遠
 小
 田
 猪
 乙
 髪
 髪
 多
 少
 由
 甲
 斐
 々
 姿
 那
 方
 比
 方
 と
 度
 き
 逃
 去
 代
 後
 某
 の
 代
 何
 事
 今
 は
 此
 事
 故
 也
 夫
 等
 言
 へ
 せ
 ば
 此
 事
 故
 也
 夫
 等
 言
 へ
 せ
 ば
 此
 事
 故
 也

永々の病
 小八費のまね
 田舎のむね
 父が看養とほち
 僅のなりとも
 のたしめと操る
 細き煙りも
 立のゆて
 叔大迫が
 小な一たる
 勤七といふ
 けくは切ら



勤
 五す
 の通
 子供
 おま
 永の
 如
 万
 けり

閑ひるる
 事あり
 ぬさ
 ねさ
 せど
 幸と



金
 中
 病
 次

成五七三三

三

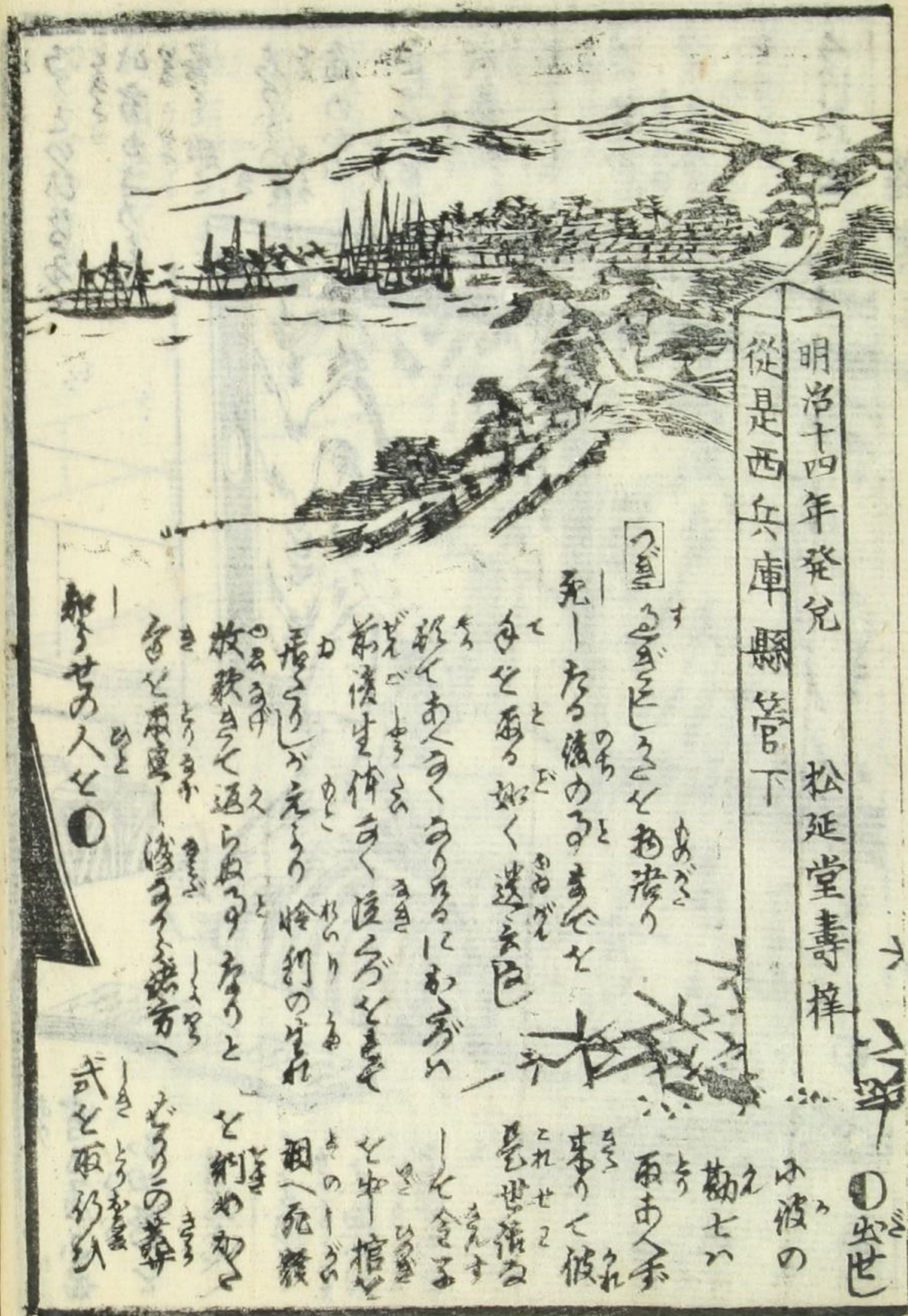
つぎ まつり辺へ来ては
 僅少なれども二三日の
 著一の足しおきしを
 ひよの大迫お
 房一まき
 の毒あると
 まねが又ぞろ
 形よりのま
 らんとひよま
 勤七まのむぎ
 折南あひし
 切とあふする

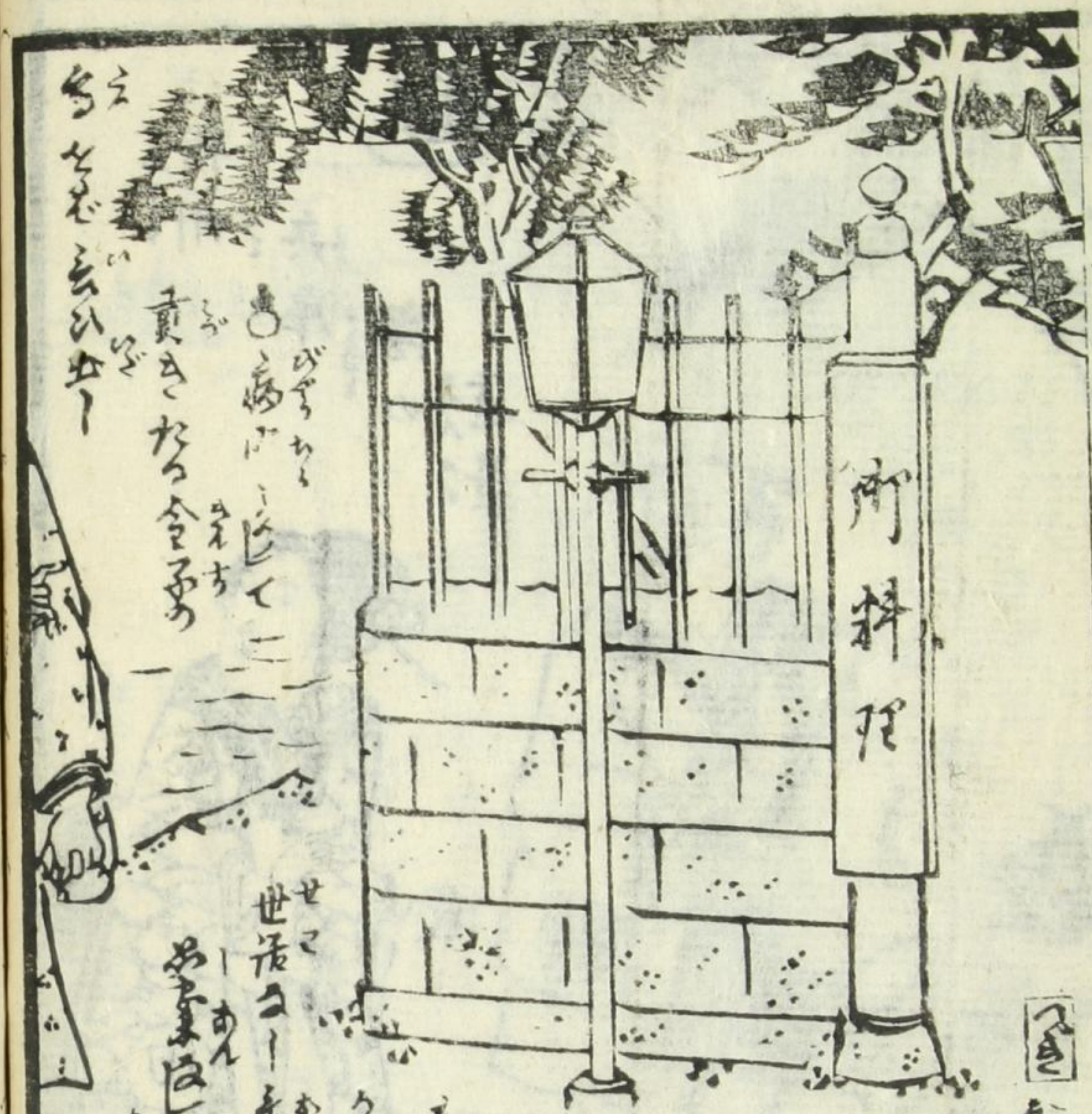
勤七の病をみる小暮り
 つまき及毒の少くのを金
 と毒くは房へるに文迫
 お小あ不換人の情け
 小徳ことと
 日の棚り
 へま
 病て
 今いた
 影も少あ死
 世帯
 共は
 病に
 病て
 今いた
 影も少あ死

と
 夕といひるを
 け方由さのそへ
 吾と離く
 あつらひ
 庭のお心
 さしと替
 同相借
 後さんと
 愛納め
 つまき
 と田この
 今に全

勤
 なるが
 ちりく

あり
 有さぬ小娘
 か田務を
 ままへ
 大迫八洞
 と深め我
 角の
 と





ふきとらる令子
 お庭のうら
 びとらる令子

かたらのきか勤七の宅へ
 訂取り下女同様に
 以てりては候は事
 浦の相場の月めが抱い
 一より勤七の懐の
 義利遠路の上
 買達の令と驚し
 みるれば俵方その方
 くらたかみ時中と只今
 世話の一を方那の娘用にて
 さまはあらびと下女に
 帳面取知一人迫り



その由初りて
 あり通り
 退き退き
 備材亦有くは叶の令子ゆ
 是とせ方様子の前へ用達
 くれ令子とが
 く戻して買ひ
 ねば叶くん七が
 左へとらる方女あり
 外へ玉由あり
 松の宮で
 系とゆめあり用あり

盛紫三申



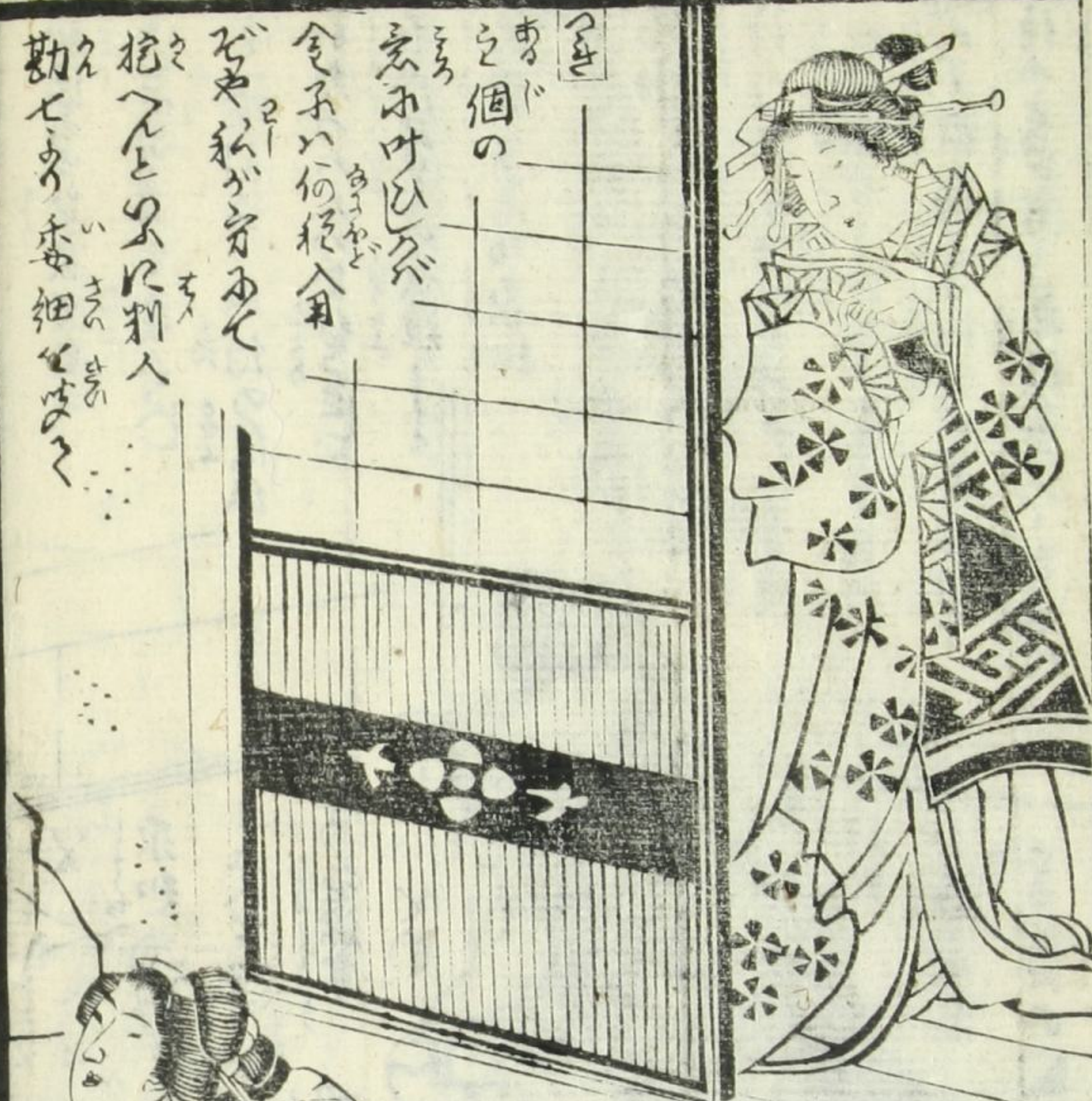
つぎあねが
尾派と日
同左はしつう之波地也

武
達ておえ
のひとねはに
おと人ハハ
はつ
風流あり
幸ハ横波の林
由如何と自身
主行てありん
勤七ハ
判人の
家と君
わく
あつと
判人ハ承知あり
垂換かたろ引
つれて林風橋
取つてめい
侍とさし子
容貌との人
はゆらと放

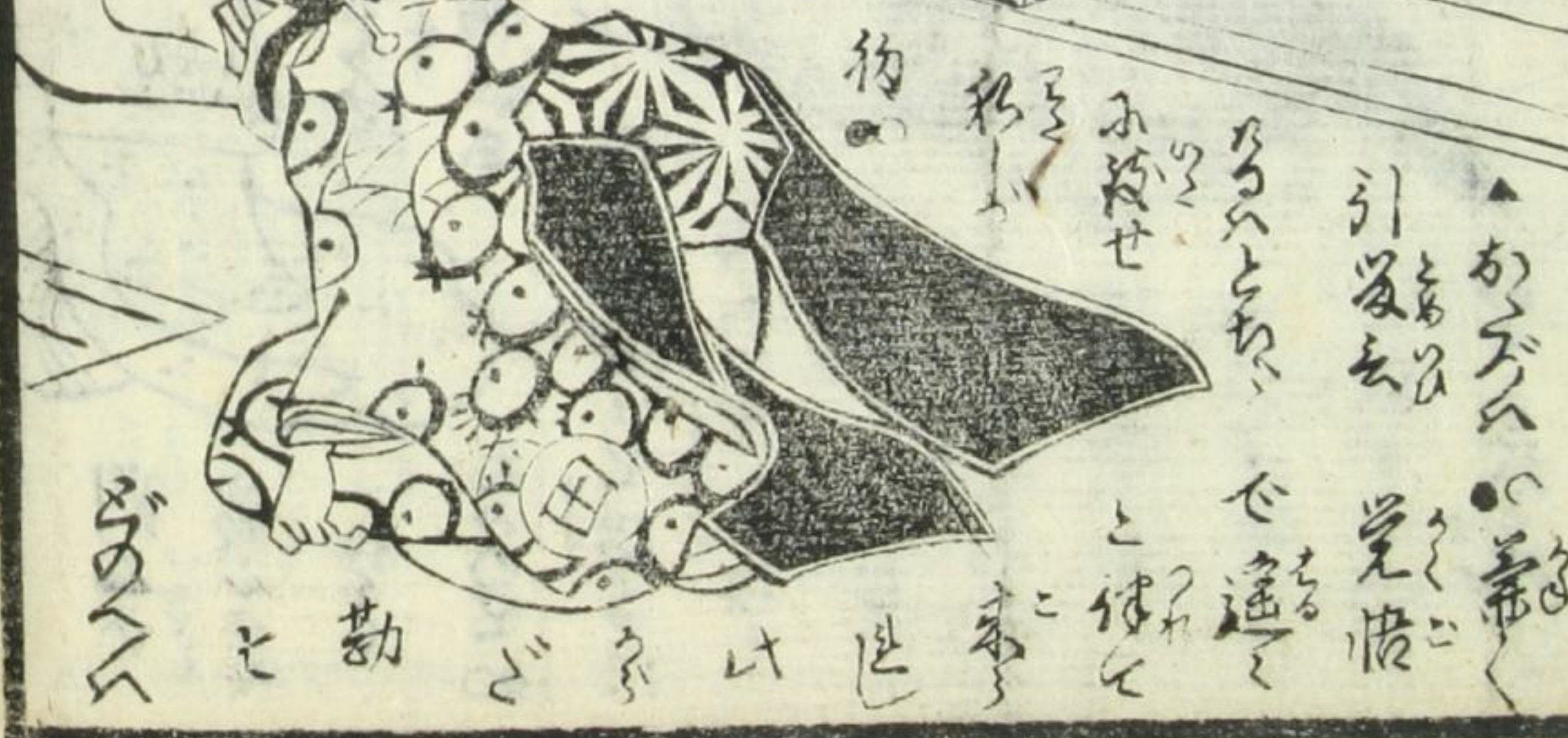
如何なるはて
はてへつ子と戻さ
と退引るがぬ相の儀ハ
かたがハ大の承知儀ガ
取合るるハ承知儀ハ
名安未と定之ぬ承知
甘く不幼七ハ大の承知
あま未と定之ぬ承知
引つては生次の白汗戸ハ
私不承知と定之ぬ承知
是ハ波勤七ガ知己の系橋辺
位不と承知と尋ね取つて個ハ



承知
一文と想
止め承知
判人の
家と君
わく
あつと
判人ハ承知あり
垂換かたろ引
つれて林風橋
取つてめい
侍とさし子
容貌との人
はゆらと放



個の
 食子何程合
 ね私分
 抱えと只判人
 勤七あり委細を
 勤七あり委細を



物
 勤七あり委細を
 勤七あり委細を

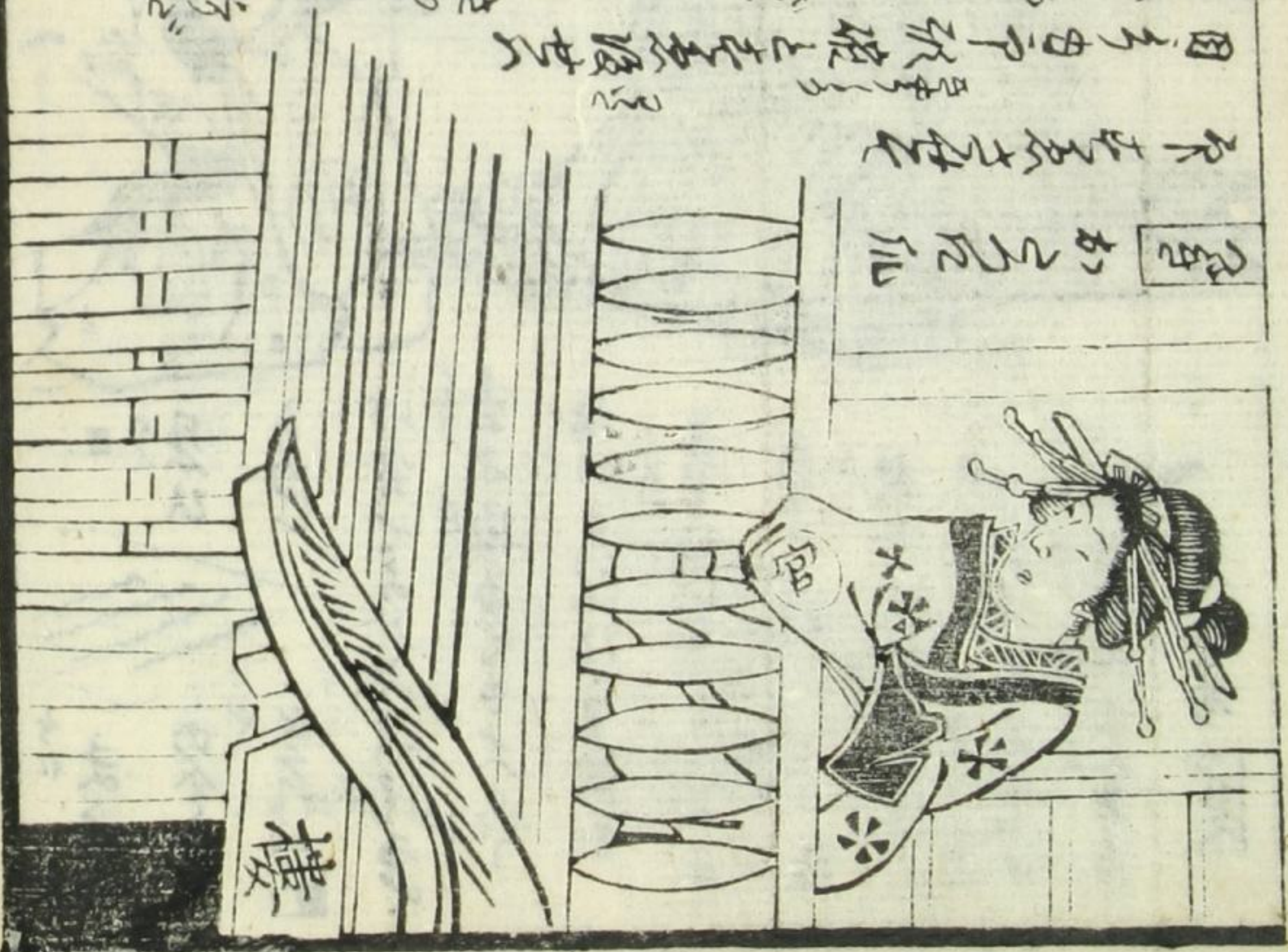
辰多るあせ先美参り入用
 八面五十四ドきま
 出たり才之個
 換取せ令
 多るあせ
 多るあせ
 多るあせ
 多るあせ
 多るあせ

福帳 入帳

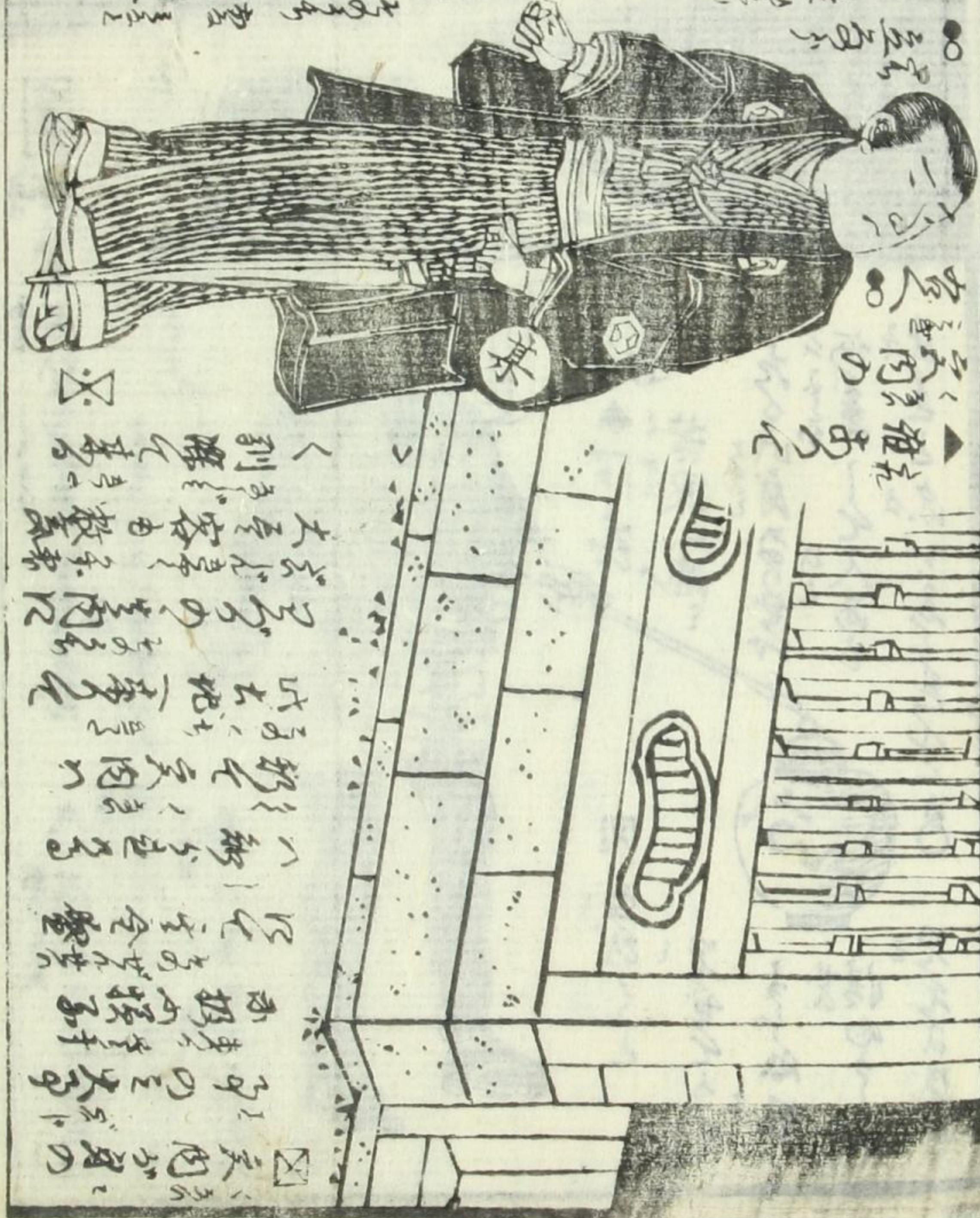


主
 判
 勤七あり委細を
 勤七あり委細を

平五十五
冠かゝる爪



因之申平破城と云云後世
 五個ハ故物之衣類の申之次第
 百五十田後迄先北が方ハ故物之次第ハ及取
 勤之世先考之次第之海一と相之有之
 是未世世流之輩一ハ也之及之及之及之
 如入之次第ハ及及及及及之
 故之各故由故方ハ大之と唱之の无れ
 思ハレケル之實内と云及之と世之也
 子之同之他の掲之と云及之と中
 此等之輩と云一に其家之あり也



三
 此の内
 此の進一個有
 其の各之個及之
 之ハ人件運方之何来
 之ハ及之及之及之

▲樓ありて
 大層之容由敬
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之
 之ハ及之及之

つぎ 海くもりの道 愛もあま

とまふ心あま

○あふ心のおもあに
禮ふたしあはして
柳の糸の風あたる



▲下衣
苦界(海)

あるは身あせつ
何年し人あま
まよと心あま

☒あひくと

あせつ
あま
あま

北廓花盛紫

三編

春亭史彦作
梅堂國政画

今常盤布施譚

三編

松林伯圓終
梅堂國政画

雪月花三遊新話

三編

篠田仙果録
梅堂國政画

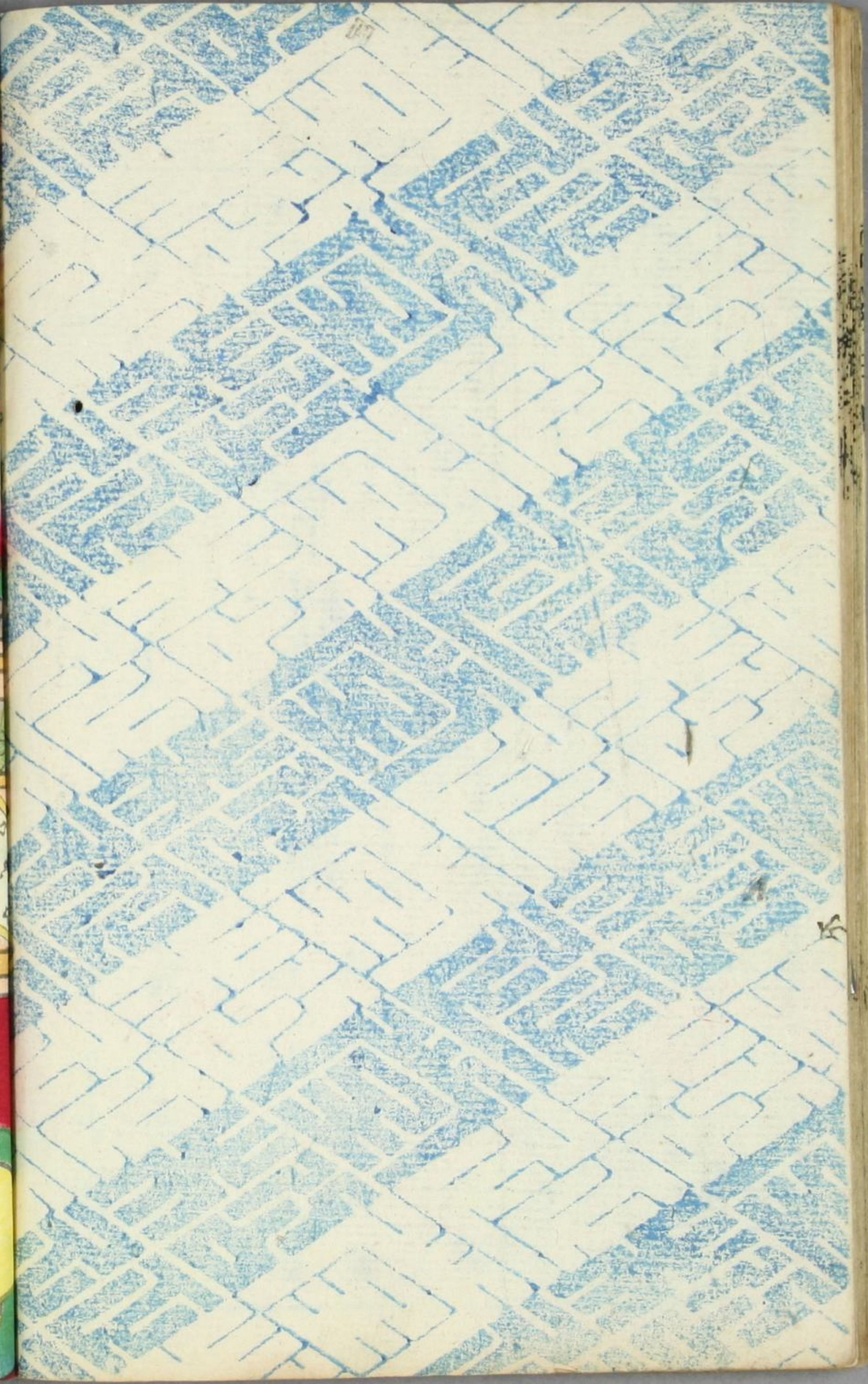
書物問屋

東京日本橋區松島町壹番地
松延堂大西・伊勢屋庄之助版

梅堂國政画



三編下

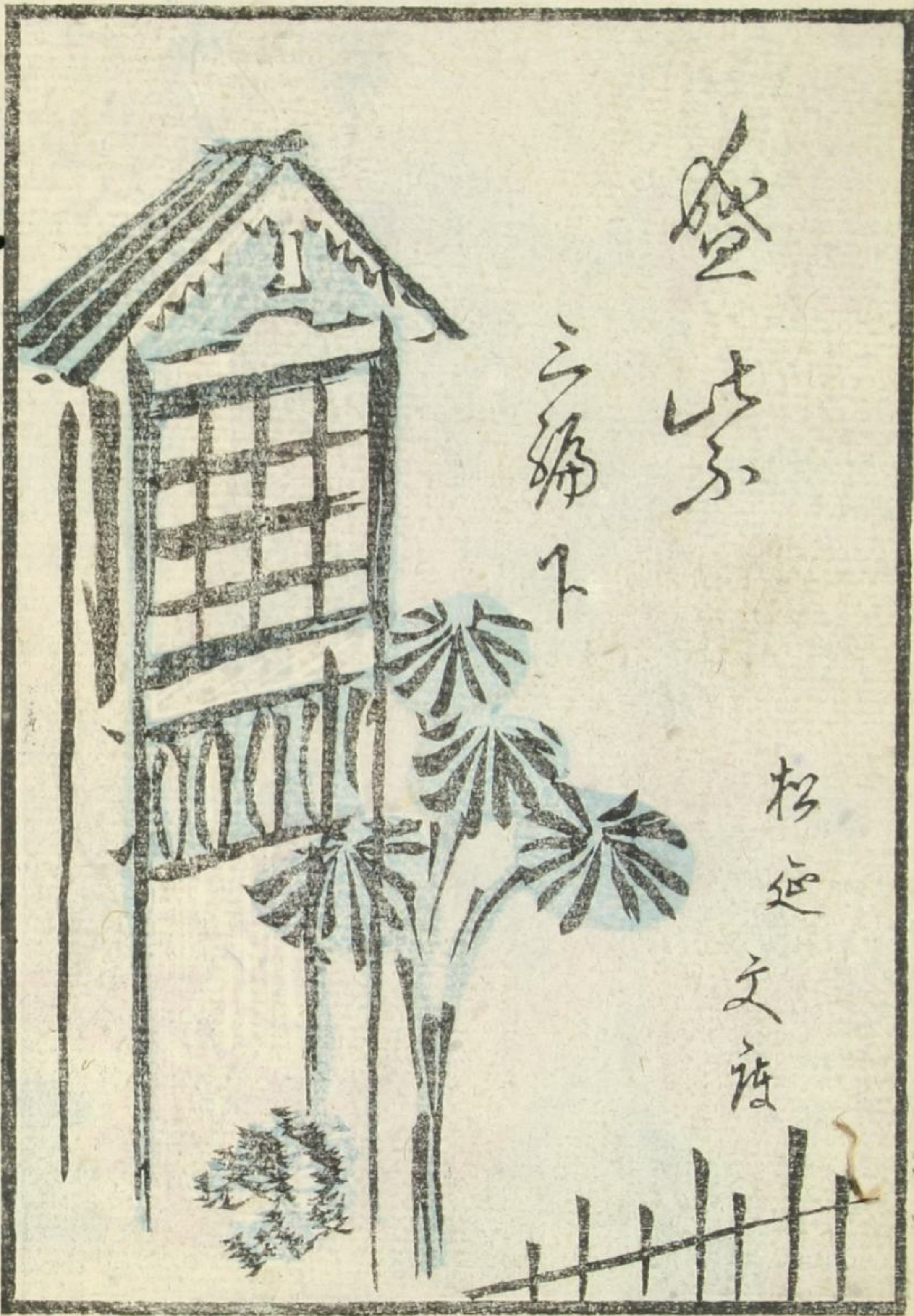


△活一元へある
 ○扱の盛系へ巻葉が
 妻小巻るる ちぢ小物
 せ一柄もあるあのを巻
 ぎて令の二面ととろろと
 碎て飛さし小形とも
 知ふは巻葉より巻りし
 ぬの文作小大のに巻る
 き取束を返すを
 巻り物せりたる
 知と和の巻せし
 子く巻はにあり ○



○妻のお清と
 んせ合せ谷が自
 ちと主とまん
 兼て巻心
 と返巻る

在の
 大をが
 返す
 同く小巻
 子
 谷
 米



盛系

三編下

松延
 文彦

つぎ 志きの郵便届きに空
 此のふらふらびをんせー金の要
 一書と取急ぎ封切切て
 漬くらせのこも如何小
 考茶と添き中どび疾く
 知りていぬとの救々出量
 吾人の念のりり由急整は
 棄れお遠しそ方小丸を
 飛らりしが今受何と若そ一の
 申たらくしそ考茶の妻と物世
 洞之虚云が初めのおつひうと
 此の是るも加安と一人洞に...



我々のにことせりまを
 つく考久飛るまおし由
 船造おまが入来り今が
 渡田の二階う私を呼に
 ふに二放性る
 さよ



善道き種の新及も秋ざねて
 ともは志
 是と添人
 びるおそ
 盛はま
 志ん
 びるおそ
 盛はま
 志ん
 米
 内院のまき
 由おれと
 このとひ
 なるに盛
 一帯一
 安ほて次へ

つぎ初めに書る

お清がむね形と

つねの形は

かたまたま

真実と余

あつち

身の故持

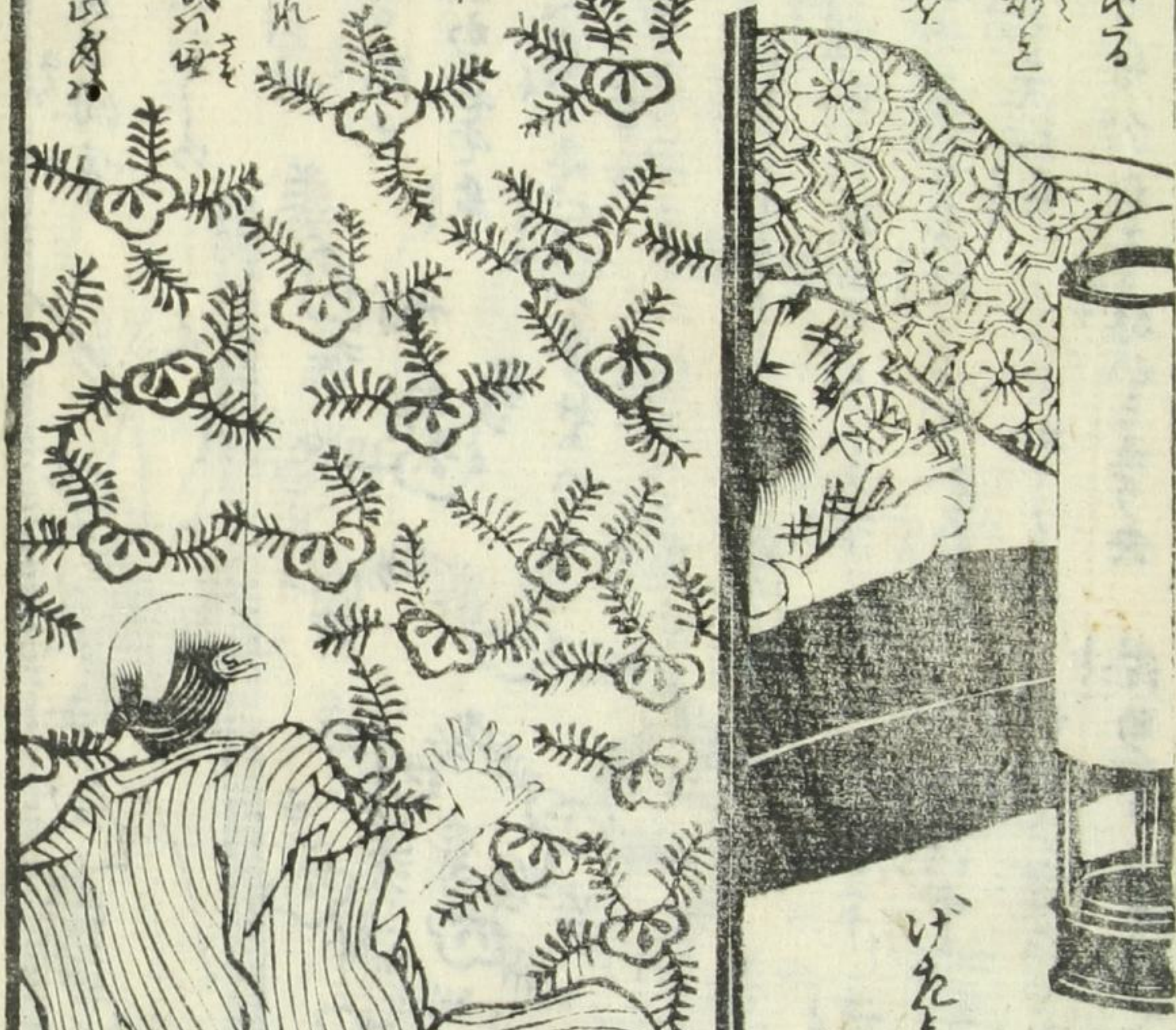
あつち

後世の備

あつち

お清のむね

お清の不冷



○様子由志

けろと

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

お清の不冷

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

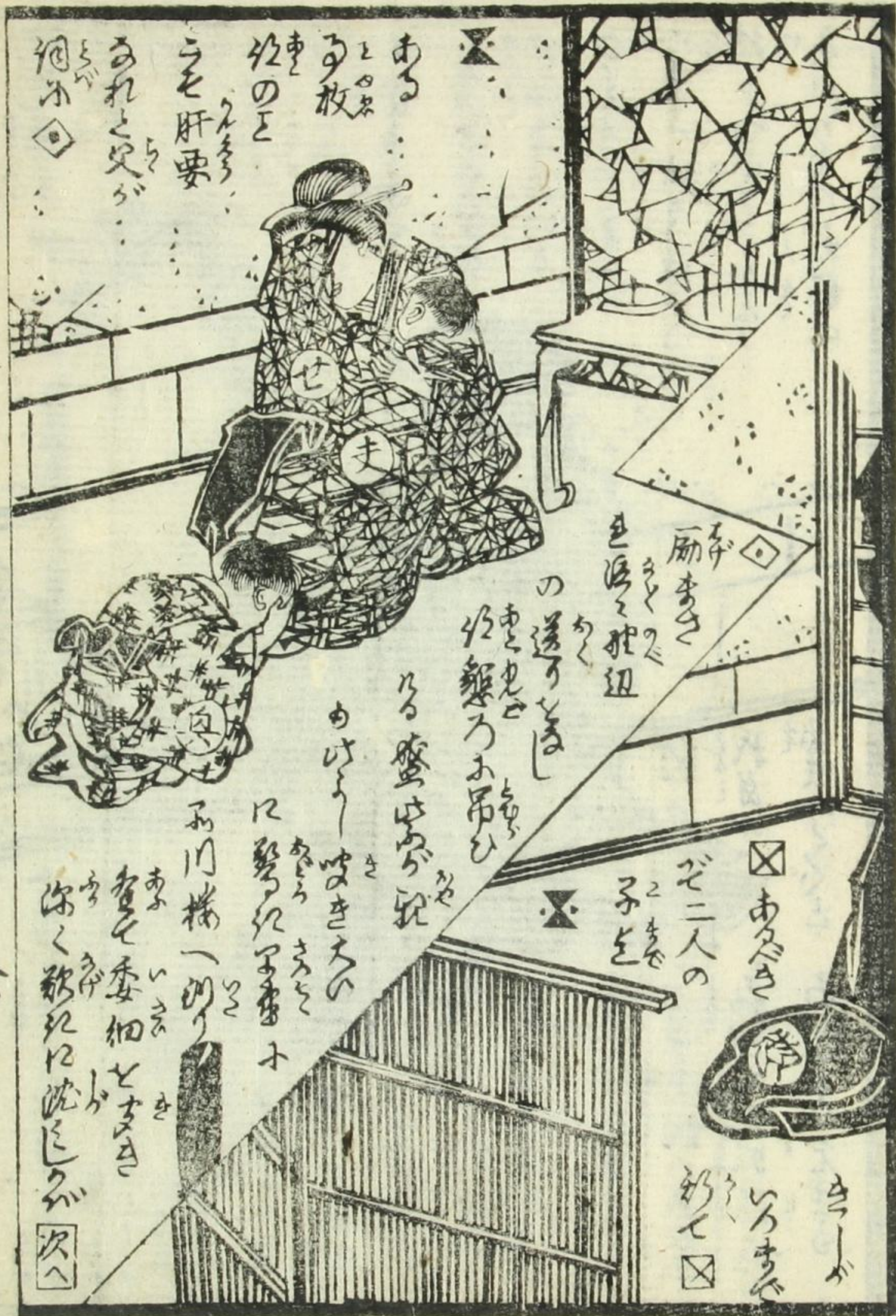
死後の笑ひを吹ほど十分覚悟をせし
 仁の名を救う友留へて盛茶の合意は
 甲向ひて柱とト具の束を束縛て用ゐ
 甘一彼短刀を抜放ち突えとせしが
 不便さふあつて眼もれむも消え
 赤筋が肉に沈着し細よ
 面白もあつたわ
 其業むかひと
 盛とらひあつて眼を閉て
 くと盛は弟が拍りとな
 費母のあつてもまゝお
 盛の娘



小二人の髪つき
 りりも新死小果
 赤い髪を急ぐ
 と取りあせせ
 小あひの夫と虫



死後の笑ひを吹ほど十分覚悟をせし
 仁の名を救う友留へて盛茶の合意は
 甲向ひて柱とト具の束を束縛て用ゐ
 甘一彼短刀を抜放ち突えとせしが
 不便さふあつて眼もれむも消え
 赤筋が肉に沈着し細よ
 面白もあつたわ
 其業むかひと
 盛とらひあつて眼を閉て
 くと盛は弟が拍りとな
 費母のあつてもまゝお
 盛の娘



あまのこ
お母さん
お父さん
おれと父が
おれ

あまのこ
お母さん
お父さん
おれと父が
おれ

あまのこ
お母さん
お父さん
おれと父が
おれ

盛茶三

六



おれと昔の父へ
おれ
おれと昔の父へ
おれ

おれと昔の父へ
おれ
おれと昔の父へ
おれ

盛茶三

六

つぎ梅さへ不使の争子
あはれきと、あはれきと、あはれきと
おれまき成せし
盛は系衣其英
礼はるのいと
あまきで美り
の事へ致さるには
致さるをさるんと
云はるるに頼縁の



▲あまきで美り
あはれきとあはれきとあはれきと
とまゝ外風襟と衣返さ
直換東京
阪東の田所
家名終せ
う一人と成り
不川襟（お縁と
致さるははは云入
りまを個へ大の外
あびて先は情死の
ありしより名世也

あいのまろこびつ
新編梅さる美り
なるあを熱者のいほひて
成豆葉う亡様と権く
柄かきとはの用きも
あつれ源門なるあはれ
院へ埋葬しをた志
びお吊ひるるけ事
世上に強きそく新写
紙上お指裁なりしと
ふ折横浪神風襟の
穴内い毫と後しより



登はるかかや
あひひの
●若界の因に勤め
の宮義理と情に
かまれて非業
の麻衣と遂は
ま一終と
新
ゆきさび且
る折掲及
小春ひあつ
本人
足夜
はし
すふふ
放ひ穴内
のおろか
用及ま
次へ

盛七三下



ついでに川橋へ参りしむ
 橋をいよいよ通ぬと
 放令子は何程入用ぞと
 金子ふらふらとふされど
 何とぞ盛はたと名を尋で
 先代の法名一書作



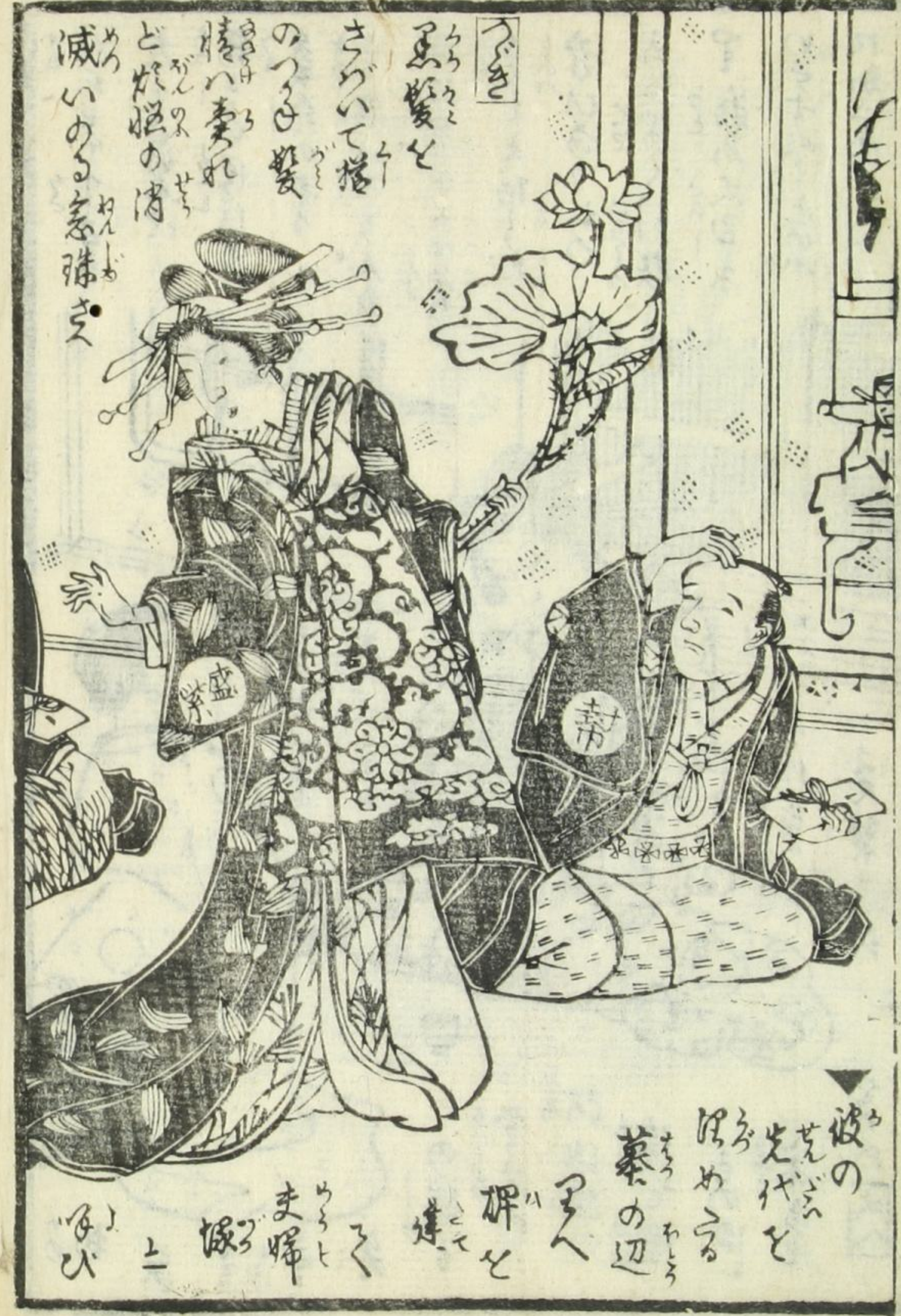
盛はたと名を尋
 先代の法名一書作

りやうわ
 蓮と云
 画の
 紙の
 張の
 糸の
 掛の
 油の
 像の

たーこひに
 橋をいよいよ通ぬと
 放令子は何程入用ぞと
 金子ふらふらとふされど
 何とぞ盛はたと名を尋で
 先代の法名一書作



たーこひに
 橋をいよいよ通ぬと
 放令子は何程入用ぞと
 金子ふらふらとふされど
 何とぞ盛はたと名を尋で
 先代の法名一書作



髪と
 さがいて
 のつ子髪
 情の妻れ
 ど娘の消
 滅いのる急殊さ

彼の
 先代を
 慕の辺
 碑を
 夫帰
 娘と



行何もさぬ苦提ん
 その殊務るむに憂也
 憂夜と以一の来客も
 束束ハ一蓮托生と何れも
 人子初むるも急
 最急く吹えなるあを白人へ
 行由借書とせしりのと辨世の
 一白一遊長の銭白と流ん
 石小刺付

人
 急
 急
 急
 急

010190513721

史彦經 國政画



近代編纂の全盛と其收入を多うする
 實に其著し名に多し其大徳の一付
 と法信と區分地獄を其由かあせと
 若家の若を其勝りたる其採休其の
 お勝りたる其由勝りたる其採休其の
 むすびり大徳山日か
 後に筆を其

柳 届 浅草馬道町六丁目
 三番地
 明治四年 沢村了方書居
 四月二十日 編輯人 吉田嘉雄
 松島町一番地
 出版人 大西庄之助

北廓花盛紫

春亭史彦作
 梅堂國政画

滋賀縣 今常盤布施譚

美談

松林伯圓經
 梅堂國政画

雪月花三遊新話

篠田仙果録
 梅堂國政画

書物問屋

東京日小橋區松島町壹番地
 松延堂大西 伊勢屋庄之助版

三九

